

～「初期生育促進」→「適期中干し」→「穂肥施用で登熟向上」～

早生の穂肥は幼穂と葉色を確認して遅れずに施用！

- 出穂期は平年より1～2日早いと予想されます。
- 分施栽培では、幼穂長と葉色を確認して1回目を遅れずに施用しましょう。
- 全量基肥栽培では、飽水管理で穂肥の溶出・稲体への吸収を促しましょう。

1 生育状況 (6月18日現在、対指標値)

コシヒカリ (連休移植) : <草丈> 長 <茎数> 多 <葉数> やや早 <葉色> 並
 コシヒカリ (中旬移植) : <草丈> やや短 <茎数> 並 <葉数> やや早 <葉色> 並
 こしいぶき : <草丈> 長 <茎数> 多 <葉数> やや早 <葉色> やや濃

水稻生育調査結果 (6月18日現在 巻農業普及指導センター管内調査データ)

品種名	移植日	草丈 (cm)		茎数 (本/m ²)		葉数 (L)		葉色 (SPAD)	
		本年値 [※]	指標比	本年値	指標比	本年値	指標差	本年値	指標差
コシヒカリ (連休移植)	5月3日	43	112	422	112	9.2	0.6	39.1	-0.9
コシヒカリ (中旬移植)	5月12日	36	92	382	101	9.2	0.6	39.9	-0.1
こしいぶき	5月4日	44	112	681	153	9.6	0.6	43.2	1.2

注) コシヒカリ (連休移植) : 5/7 以前移植、管内14ほ場、(中旬移植) : 5/10 以降移植、管内4ほ場 こしいぶき : 管内4ほ場
 ※本年値は、調査日が基準日より2日早いため日数調整後の数値を表記、指標比は6月20日現在の指標の比較

2 出穂期予想 (6月22日現在) と穂肥

<出穂期予想>

- ・出穂期は平年に比べて1～2日早まる見込み。ただし、今後の気象によって変動する。

<穂肥の施用時期・量>

- ・早生品種の分施栽培は、幼穂長と葉色を確認し、特に1回目は遅れないよう施用する。
- ・全量基肥栽培は、穂肥の肥効を発揮させるため、中干し終了後は飽水管理に移行する。
- ・高温が予想され、**穂肥後の葉色が目安より薄い場合や、出穂期までに葉色低下が予想される場合は、出穂期3日前頃までに窒素1kg/10aを目安に追肥を行う。**

◎幼穂形成期・出穂期の予想と穂肥時期・施用量目安 (5月3～6日移植、出穂期が2日早まった日付で記載)

品種名	幼穂形成期 ^{注1} 月/日	出穂期 月/日	穂肥時期 月/日 (出穂期前日数)		2回目穂肥 時期の葉色 (SPAD)	2回の合計 施用量 ^{注2} N kg/10a
			1回目	2回目		
五百万石	6/24	7/17	6/27 (20)	7/5 (12)	38	1.0～2.0
わたぼうし	6/26	7/19	6/27～29 (22～20)	7/7～9 (12～10)	38	2.0～3.0
ゆきん子舞	6/27	7/20	6/25～27 (25～23)	7/6 (14)	36～38	4.0～6.0
こしいぶき	6/29	7/22	6/29 (23)	7/8 (14)	36.5	2.0～3.0
こがねもち	7/5	7/28	7/10～13 (18～15)	7/18 (10)	32	1.0～3.0
連休植 コシヒカリ	7/9	8/1	7/14～17 (18～15)	7/22 (10)	32	1.0～3.0
5/10 植 コシヒカリ	7/11	8/3	7/16～19 (18～15)	7/24 (10)	32	1.0～3.0

注1 : 幼穂形成期は、幼穂長1mmを超える茎が調査区全体の8割を超えた日、出穂期の23日前頃。
 実際の幼穂形成期・出穂期は、天候により前後するので、幼穂や生育状況をよく確認する。
 移植日が5日前後すると幼穂形成期・出穂期は1～2日前後する。
 注2 : 砂壤土などの地力の低いほ場では、窒素成分で1kg/10a程度多めに施用する。

◎**穂肥診断** ～穂肥時の幼穂と葉色を必ず確認して遅れずに施用！～

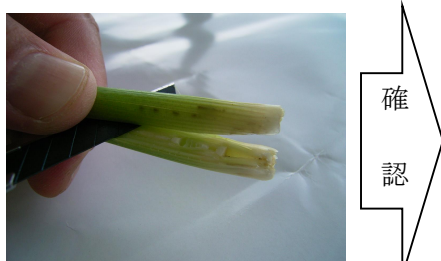
1 回目穂肥時の生育量目安

	こしいぶき(出穂期 23 日前)	注意点
幼穂長	0.1 cm	葉色が 37 (SPAD 値) より濃い場合は、 1 回目を施用しない。
草丈	55～60 cm	
茎数	29 本/株 (60 株/坪植)	
葉色	35～37 (SPAD 値)	

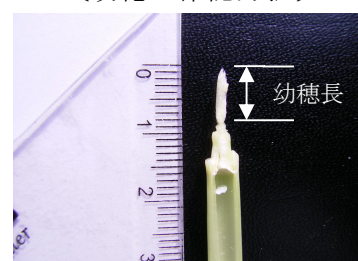
○ポイント
早生品種は幼穂長 0.1cm を確認後、遅れずに 1 回目穂肥を施用する。

◎**幼穂長と出穂前日数**

出穂前日数	幼穂長
30 日前	0.02 cm
24～23 日前	0.1 cm
20 日前	0.2～0.4 cm
18 日前	0.5～1.0 cm



[幼穂の確認方法]

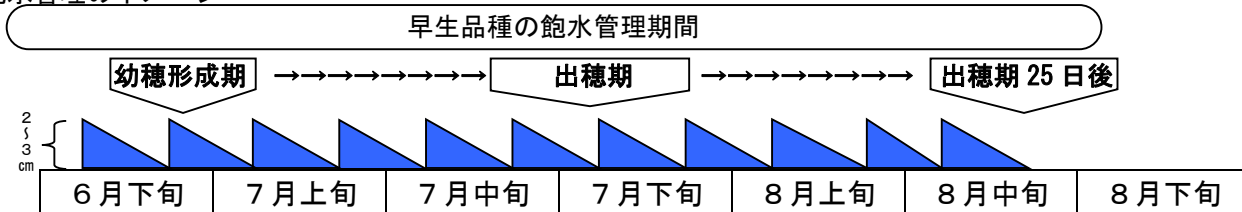


3 水管理 ～ 早期落水厳禁、飽水管理で登熟向上！ ～

- ・中干しは、出穂期の 1 か月前までに終了し、間断かん水から徐々に飽水管理に移行する。
- ・**出穂期 25 日後までは飽水管理を継続し、登熟向上を促す。**
- ・**フェーンや異常高温が予想される時は、あらかじめ湛水して障害の発生を防止する。**
フェーンによる高温期が過ぎたら落水し、根腐れを防止する。その後も高温が続き、湛水の継続が必要な場合、2～3 日で水を更新し、**長期間ため水にしない。**

飽水管理：水尻を止水し浅水(水深 2～3 cm)で水をため、自然に田面の水がなくなり、溝や足跡の底から水がなくなり始めたらかん水する管理

飽水管理のイメージ



4 病害虫防除 ～適期防除でカメムシ類による斑点米被害防止！～

(1) 斑点米カメムシ類

ア 除草

- ・**農道・畦畔の草刈りは、雑草が結実しないようにこまめに行う。**特に、早生品種の出穂前となる**7 月中旬には、必ず実施する。**
- ・**本田内のノビエやホタルイはカメムシ類の増殖場所となるので、本田除草も徹底する。**

イ 薬剤防除

- ・通常は共同防除により防除。**本田の薬剤防除は出穂期 3～7 日後に、ほ場全体へ散布。**
- ・水面施用粒剤を使用する場合、水深 3 cm 程度の浅水湛水し散布、7 日間は落水しない。
- ・共同防除の実施日が出穂期から 10 日以上空くほ場は、個人防除を追加する。
- ・薬剤により散布適期・回数が異なるため、薬剤の使用方法を確認すること。

(2) 紋枯病

- ・昨年発生が多かったほ場では、適期に予防粒剤を散布する。
(箱施用剤で防除している場合は、この時期の防除は不要)。
- 多発生しやすい品種：わたぼうし、ゆきん子舞、こしいぶき

(3) 墨黒穂病

- ・わたぼうしは発病しやすいため、必ず発病前に薬剤防除する。